

講義名	対)論文作成方法論研究			授業形態	
担当教員	向山 雅夫	開講期・曜日・時限	前期 木曜日 2時限		
		単位数	2	履修開始年次	1年生

主題と概要

本講義では修士論文の作成を視野に入れて、問題意識から研究テーマの選定、文献レビュー、調査計画の策定、仮説のたて方、事例研究の手法についても取り上げる。研究方法論としてフィールドワークや事例研究の手法についても取り上げる。毎回の授業計画に沿って、受講者は課題を消化し、その報告内容について質疑やディスカッションを行う。最終的には、修士論文の研究計画書をきちんと作成できるようにする。

到達目標

修士論文作成の基礎づくりを通して、その進捗をもとに論文構成、論理展開など論文としての精緻化ができるようになる。

提出課題

随時レポート（研究計画書、参考文献リスト作り）を提出させる。最後に、修士論文の研究計画書を作成させる。

課題（レポートや小テスト等）に対するフィードバックの方法

レポートは講義中に全員の評価を行う。

評価の基準

講義への貢献度（30%）、レポート（20%）、研究計画書（50%）の3つによって総合的に評価する。

履修にあたっての注意・助言他

本講義では教科書は使用しない。その意味は、特定の教科書に従って、毎週その自筆を説明するという形式は採用しない。

ただし、毎週の本講義のテーマは、下記の3冊の参考図書のいずれか、あるいはいずれにも、必ず説明が掲載されている。よって、講義開始までに、下記3冊の参考図書のうち、どれか2冊を購入しておくこと。そして、毎回の講義開始前に、あらかじめ参考図書の該当箇所を予習しておくこと。

購入した2冊の参考図書は、修士論文執筆時に常に参照する必要があるため、購入しておくことが修士合格のためには絶対とも言える。

教科書

.使用しない。				
---------	--	--	--	--

参考図書

.最新版 論文の教室。	戸田山和久	NHK出版	978-4-14-091272-0
.社会科学系論文の書き方。	明石芳彦	ミネルヴァ書房	978-4-623-08379-4
.学術論文の技法（新訂版）。	斎藤孝ほか	日本エディタースクール出版部	4-88888-352-1

その他

授業計画

- 第1回 4月14日 ガイダンス
- 第2回 4月21日 実力測定レポート作業日
- 第3回 4月28日 レポート解説
- 第4回 5月5日 レポート解説
- 第5回 5月12日 論文の正しい書き方
- 第6回 5月19日 先行研究の仕方
- 第7回 5月26日 文献リストの書き方・作り方
- 第8回 6月2日 文献リストの書き方・作り方
- 第9回 6月9日 文献リストの書き方・作り方
- 第10回 6月16日 論文作成に関する誤解
- 第11回 6月23日 研究テーマの見つけ方
- 第12回 6月30日 修士論文研究計画書の作成方法
- 第13回 7月7日 研究計画書評価
- 第14回 7月14日 研究計画書評価
- 第15回 7月21日 最終レポート作成

授業形態（アクティブ・ラーニング）

<input type="radio"/> ア：PBL（課題解決型学習）	イ：反転授業（知識習得の要素を授業外に済ませ、知識確認等の要素を教室で行う授業形態）
<input type="radio"/> ウ：ディスカッション、ディベート	エ：グループワーク
<input type="radio"/> オ：プレゼンテーション	カ：実習、フィールドワーク
<input type="radio"/> キ：その他（A-L型であるけども、以上の項目のいずれにも該当しない場合）	

準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

- ・毎回の講義テーマに関して、事前に参考図書を読んでくる（必要予習時間 2時間）
- ・毎回の講義テーマについて、理解したどうかの確認作業を参考図書と比較して確認する（予定復習時間 2時間）

卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目の関連

1. 論文作成方法についての基礎を徹底的に学ぶことができる本講義を通じて、理論的・実証的な課題を研究するために必要な科学的的方法論を身につけることができる。
2. これから修論テーマを決める学生にとって、テーマの決定方法・研究方法など必要な作法を、実際の作業を経験することによって、必要な研究能力を養成することが可能になる。
3. 修論作成に必要な思考方法・手順を本講義によって身につけることができるため、一層理論的観点から高いレベルの修論作成が可能になる。

双方向授業の実施及びICTの活用に関する記述

受講者数が20名未満で、ICTを用いなくても双方向授業の実施が比較的容易である。毎回の授業は、課題を消化する作業によって構成され、それに関する質疑応答が講義の中心形式となる。

実務経験の有無及び活用

備考